



# 「ライブは僕のオリジナル」。音楽通し「至福の時間を味わう」

秋本修一

多くの音楽人が学生を卒業するとともにライブ活動をやめる中、会社員になっても続けるミュージシャンがいる。なぜ、音楽を続けるのか。充実感溢れる生き方を語ってもらおう。



1965年3月群馬県生まれ。大学卒業後、商社に勤める傍ら、エディイ秋本として音楽活動を展開しオリジナルソングを中心に自作自演のアルバム「First Movement」「Everlasting Summer」を制作

「就職すると、ライブ、音楽をやめる人が多いですが、続けてきたというのは？」

秋本 オリジナルを書くようになって、音楽の本当の面白さ、奥深さ、音を操る難しさを知って、本当の意味でやめられなくなりました。私の知っている人でも、やめてしまった人がいますが、特に、ピアノを小さい頃からやって、学校を卒業したら一緒にピアノもやめてしまったという人が多い。それなどいい例ですけど、結局、日本の教育と同じで、通り一遍のこゝししか教えないから、バイエルが終わりました、じゃあ、終わりですって感じて、本当の音楽の面白さ、奥深さといったものを結局知らずに通り一遍のこゝしをして終わってしまう。私にとっては、音楽はごはんのようなもので、ごはんは食べずにはいられませんよね、それと同じでやらずにはいられない。

「仕事をしながら、音楽活動の時間も作って……。」

秋本 学生の時に比べて自分の時間というのは少なくなりますけど、時間は自分で作り出すものであって、自分にとって尊いものであれば、どんなにきつくても絶対時間というのはできると思うんですよね。だから

私はテレビを見る時間もないですし、中くつろぐ時間もないけど、それでも充実しています。自分の好きなことであれば、精神的に全然ハードさ、つらさを感じないし。

「いつ頃から音楽を始めたのですか。」

秋本 十三歳の時に、ギターを始めてからです。その頃フォークが流行ってて、ギターが弾けると女の子にもてるといった状況もあって(笑)。なぜか、クラシックから入ったんですけど、そのため楽譜が読めるようになったのは良かったと思います。高校から友達とバンドを組んで、ロック中心で、

ライブも始めました。大学で、フェイジョーン、ロック、ポップス等いろいろやるようになったんです。大学生活は忙しく、E.S.S、テニスと、バンド以外のこともやっていました。割と講義の方もまじめに出る学生だったんですよ、何を隠そう(笑)。バイトばかりの生活ではなかったですね。

学生時代にしかできないことをやりたいと思っていましたから。会社に入り、自分のオリジナルの曲をやるようになって、バンドのメンバー各々の時間のスケジュール、嗜好性、テクニックとかの問題が出てきて、活動が中々うまく続かないし、最近ではコンピュータ等で一人でもいろいろできるようになって、それなら、と一人で始めました。ギター以外はコンピュータ等でやっています。二十五歳ぐらいの時からです。

「これまでに作った曲はどれくらいに？」

秋本 四十曲くらいかな。七割がインスト(歌詞なしの曲)で三割が歌詞つきの曲です。インストは、七割がフェイジョーンで、ボサノバ風、ジャズっぽいものの中にあり、後の三割は、メロディに歌詞をつけたものです。ソロギターだとクラシックも弾くことがあるし、最近のポピュラーミュージックをア

▼今年の10月23日に新宿ON AIRのスタジオにて秋のライブを行なう。新しいオリジナル曲も披露する予定

レンジしてやつたりもしています。ライブのステージは、秋本さんにとつてどんなものですか？

秋本 重要な私の自己表現の場、私の人生における一つのステージでもあるし、アイデンティティの一つでもあると思う。

「ライブまで、どれくらいの時間をかけるのですか？」

秋本 莫大な時間とエネルギーを注いでいます。作曲、アレンジ、各パートの演奏、プログラミング、ステージングまで全部自



▲今年5月の新宿でのライブ。楽しいおしゃべりもある

雑誌に太陽を●サンバウ

1993 No.310

〒604-2383 京都市西京区藤原 1 丁目 10 番 1 号 発行所 1993 年 10 月 10 日 発行 第 310 号

# Sun Power

## 10

特別企画

やっただぜ! 僕らの青年フェスティバル



▲自宅でアルバム制作中

分でやり、ライブにのそむわけですから。例えば、オリンピックの選手と同じだと思います。オリンピックのために、何年も時間をかけて練習して、一瞬の技にすべてが集約される。私の場合も似ていて、ライブは私のオリンピックのようなものですね。一人でやっていることもあって、非常にハードであるけれども、非常にやりがいがあります。だから、喜びも人一倍どころか人十倍くらいではないかな。

—ライブを見ていて、表情もいきいきしているし、萩本さんにとってライブは至福の時ではないか、そういう時があるというのはいいなと感じました。

萩本 社会人になると、自分の時間が制約されてきてしまい、忙しい忙しいと、時間にも人にも流されてしまいがちです。そんな中、燃えられるものがあるというのは幸せに思っています。ライブをやっている時は私自身生きているという実感をもてます。ある種のエクスタシーもあるかな(笑)。

—それだけ時間を費やして一生懸命やっても、ライブでは、料金をそんなに取らないですよね。

萩本 毎回大赤字なんですけどね。僕にと

って自分の作品が批判されるということよりも、誰にも聴かれずに埋もれてしまうのが一番寂しいことなんです。お金の問題ではなく、お金に代えられない経験を自分自身積んでいると思う。また、音楽に限らずアートというものはお金に代えられない。

ライブを通して、反省したことや、発見したことが次回のライブへの課題になって、それをクリアすることによって自分自身成長ができる。また、お客さんによかった、楽しかったと言ってもらえることが何よりですし、次回の励みにつながっていきます。

—萩本さんの曲を聴いていて、夢を感じさせるものがあります。曲の中に夢があると。生き方においても、そうなのではないですか。

萩本 忙しさに追われると考え方も皮相的になりがちですが、豊かな心でありたいし、没頭できる音楽を通して、夢、ロマンを常にもって生きたいな。すべての曲に夢があり、その夢、イメージに向かって努力、前進する姿に人間らしさがある。アートの場合、夢というのは叶えづらく、莫大なもので限らない。一つひとつの作品が夢であり、コンセプトアールなものでもあります。

—音楽活動に対する抱負を。

萩本 当分はまだまだ一人でも勉強することがあると思うので納得の行くまでソロで頑張っていきたい。音楽に反映できるのは、音楽的経験だけでなく、人間的経験も出ますから、それを積んで人間的にももつと成長したいと思っています。死ぬまで、燃えられる音楽をやり続けていると思います。

—一生、続けたいと。

萩本 一生続けますし、やめられないんじゃないでしょうかね(笑)、ごぼんと同じですから。(多)

